

子どもの家事遂行を規定する要因

—子どもの学齢別にみる母親と父親の関わり方の相違—

花形美緒(お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所)

【目的】

子どもには自身の生活自立として、また家族の一員として家事を行うことが求められるが、その分担を規定する要因について検討した研究は夫婦間のそれよりも極めて少ない。子どもは自分の身の回りのことや生活に関わる行為をどの程度遂行し、そこには母親から子どもへの「家事促進行動」としての働きかけほどの程度影響があるのだろうか。家事を行う家族員数が増加することは、一人当たりの分担や負担を軽減することが可能となる。しかしながら子どもが未就学の場合と小学生、中学生以上の場合では遂行可能な家事内容も異なることが考えられる。そこで本研究では、子どもの家事遂行の規定要因を学齢別に探り、母親の家事促進における子どもへの働きかけや父親の関わりが子どもの家事遂行に対してどのような影響を与えるのかを明らかにする。

【方法】

本研究では、お茶の水女子大学・社会連携室外部受託研究(代表者:石井クンツ昌子)の一部である「子の発達段階に応じたキャリア・デザイン研究会」(代表者:坂本有芳)の一環として実施した Web アンケート調査の個票データを用いて、第一子の家事遂行を従属変数としたパス分析を行う。分析で使用する調査は、首都圏(東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県)に在住し末子が中学生以下の子どもをもつ母親を対象とした Web アンケート調査で、2013 年9月に実施された。標本抽出は株式会社マイボイスコムに登録モニターより対象者を末子学齢で層化し各層内で末子学齢別の就業率に応じた比例割り当てを行った層化無作為抽出法である。メール配信 1660 名、有効回答数 502 名のうち、本研究では第一子年齢を回答した 501 名を分析対象とした。

主な使用変数は、属性、第一子の家事遂行、子どもへの家事促進、子どもとの関わり、母親の生活時間増減意向、父親の家事遂行などである。

はじめに各変数の記述統計、さらに変数間の相関関係を確認し、その後パス分析を行った。分析には SPSS21.0、Amos17.0 を使用した。

【結果および考察】

第一子が未就学児の場合、子どもの家事遂行は、父親が子どもに関わっているほど高いことが明らかになった。第一子の年齢が高く、女の子である場合に家事遂行が多く、母親から家事促進行動がある場合に多くなっていた。母親が「もっと時間がほしい」と感じている場合には、子どもの家事遂行は少ないことも示された。子どもが幼いうちは子どもと一緒に過ごす時間は必要と感じるものの、未就学児の場合は、子どもの家事遂行も子どもが一人で言うより親と一緒に行動することが考えられ、幼い子どもに家事をやらせる(一緒に行動)とかえって時間がかかり、ますます自分の生活時間が足りなくなってしまうことへの懸念があると考えられる。

第一子が小学生の場合、母親が就業している場合は子どもとの関わりが少なくなった。父親の帰宅が遅く、在宅活動時間が少なくとも父親が家事を行っていることから、家庭内での家事分担が明確になってくる。母親が家事促進行動をしているほど子どもは家事をしており、小学生の子どもは家族の一員として家事を担い得る十分な戦力となっていることが窺えた。一方で、父親が家事をしている場合に子どもの家事遂行が有意に減少していた。家庭内で分担項目として挙がるような家事はある程度決まっており、誰かが実行すれば家事としては終了し、誰かはしなくて済むものになっているということが示唆された。

学齢別パスモデルでの分析結果から、母親は子どもの年齢に応じて関わりの頻度が変化し、また自身の就業状況によっても父親の家庭内での家事育児遂行の度合いが変わることから、母親の子どもへの関わりや生活時間の意向も変化することが明らかになった。分析モデルや分析の詳細は自由報告で提示する。